

# 花で語る

## 命いたただく華道 瞬間を意識させ 人と人をつなげる

生け花を目にする機会も多い正月。一年の過ごし方を思索する人々を花たちがそっと見ている。人はなぜ花にひかれるのか、花は何を語るのか。人の生き方、社会のあり方にも何かを訴える花。内外の事件や厳しい政治情勢、地球全体で騒がしさが持ち越された新年。花と生きる「華道家元池坊」の次期家元、専好さんに聞いた。

——華道の歴史で、池坊はどういう存在なのでしょう。

「京都市中京区の烏丸通りの東側に、都の中心に当たる『へそ石』と呼ばれる礎石があります。そこに立つのが六角堂（紫雲山頂法寺）で、池坊は代々そこで花を生けてきました。応仁の乱の5年前、1462年に六角堂の僧、池坊専慶がある武士に招かれて花を挿したら、都の人々の評判になったと書かれているのが記録に残る最初です。実際にはもっと前、仏教伝来のころから花を立てていたのではないかと思われま

——六角堂は、修行時代の親鸞がこもった場所ですね。

「六角堂の始まりは、聖徳太子が如意輪観音像を安置したお堂にさかのぼります。北側に太子が水浴したと伝わる池があり、ほとりに僧坊があったことから、その住職が『池坊』と呼ばれるようになったのです。その頃、仏に花を捧げる仏前供花という風習も伝わりました。池坊の代々の僧たちは、花を捧げることに様々な工夫を重ね歴史を紡いできました」

——仏に捧げることが生け花の始まりですか。生活に彩りを与え

### 「華道家元池坊」次期家元

いけのぼうせんこう  
池坊 専好 さん

1965年生まれ。「華道家元池坊」の45世家元、専永氏の長女に生まれる。89年に次期家元に就任。2015年に専好を襲名した。

たり、自然に親しんだりすることが最初と思っていました。

「花を生けることに、そうした楽しみや要素があることは確かですが、始まりは仏教からでした。池坊は仏前供花だけに終わらせないで、人と花との関わり、さらに花を介在させて、人と人とのつながりも考えてきました。花を介した師弟の関係も、単に技術の伝承というところに終わらせず、師の人生や考え、美に対する哲学などを学んで、自分の糧にしていく。しかし、上意下達ではなく、弟子から師が学び、体得することもある。

る。そうした双方方向のつながり、関係性を成熟させていったから、長く続いてきたと思います」

——そうした役割の仲立ちと聞くと、花は人間にとって大きな存在に映ります。「道」のつく世界は、茶道、香道、書道もあります。華道の特徴はなんでしょう。

「動物も植物も生きています。は、すべて人間と同じ運命をたどります。生まれ、成長し、死んでいく。この宿命は、生きていく限り逃れられません。華道のほかに『道』のつく修行はあり、それぞれの世界で技をもって自分を鍛え深めようという試みがなされているわけですが、生け花は、生きものの命をいただいている。生きものを介在させているゆえに、生死と裏表にあり、常に瀬戸際、瞬間を意識せざるを得ない。だからこそ、人と人をつなげる力を強くさせる働きがあると捉えています」

——生きものをつかうことは、ある種の切なさ、言い方をかえれば人間の業や独善性をはらんでいませんか。

「罪深いことだと思っ

のに、人の目と手と技が加わることで、第2の花の人生を全うさせているか、自然とは異なる美を出せているか、本当に生かし切っているのか、常に自問自答しなくてはならないと戒めています。自然のままの方がよかったですら、自己満足、花をもてあそんでいるだけになってしまいます」

——生かし切るの難しく、それができると考えること自体に人間のおごりがありませんか。

「年齢を重ね、数少ない材料で、いい作品とは何か、魅力を引き出せるかを考えるようになりました。せめて命を奪う対象をできるだけ少なくしようと考えます」

「池坊には『数少ない心深し』という言葉があります。たくさん集めた造形よりも、1輪、2輪の花、1枚、2枚の葉、ひと枝ふた枝。そういったものを最小限のボリュームで、ぐっと凝縮する。それは飽食といわれる今の時代性にも合致していると思います。大量消費でたくさんつくって、ろくに使わずに捨ててしまっているのではなく、自分の身の丈に合ったミニマムに生きる。制約があるから、かえってエネルギーが凝縮される。少なさは寂しいことでも貧相なことでもありません。多くのメッセージが読み取れ、伝えられるのです」